【北海道新聞社許諾　D1010-1104-00006919】
第3種郵便物認可

文　化

古戦場ボロジノ・南・北大東島・

# 奇縁たどる旅 上

木村　崇

# ロシア人が見つけた？

北大スラブ研究センターが取り組んでいるプロジェクトのひとつに「境界研究」がある。これに多少関わっている私は、同センターと琉球大の共催シンポに参加するため那覇を訪れた。帰る日の前夜、南大東村の観光大使を紹介された。今年1月末のことである。

彼女の話はこうだった。「南・北大東島を発見したのはロシア人の船長で、船の名前にちなんで『ボロジノ諸島』と名付けた。一八五〇何年かの英国海軍の海図にもその島名が載っている、と村誌には書いてある。南大東島には『ボロジノ』という名の会社や店がたくさんある。かねてからボロジノという所へ行って、ナポレオン軍とロシア軍の戦闘再現野外劇というのを見たいと思っていた。ロシア大使館へ行って聞いてみたけれど、よく分からないから旅行社で聞けといわれた。あちこち旅行社に問い合わせてもボロジノがどこにあるかさえ知らなかった。そこで、ロシアに詳しい人が今那覇に来ているというので飛んできた」。ぜひ力添えをという訴えを聞きながら、英国海軍作成の海図という間接証拠ではなくロシアの資料にあたらなければ、命名について確かなことは言えないと思った。

2月中旬、モスクワを訪れる機会ができ、その西方100キロにあるボロジノへ行ってみることにした。ボロジノ駅から雪道を5キロ歩いてようやく村役場に着いた。私が事前に送っていたメールは届いていなかった。あいにく村長も不在だったが、副村長さんが応対してくれた。彼女は「ボロジノ諸島」と名付けられた島が太平洋のど真ん中にあると聞いて驚いていた。9月の第1日曜に行われるボロジノの祭典には観光大使を連れて再度訪問すると告げて、早々に退散した。

□　□

この頃ですでに私は、二つの大東島を発見したのがザハル・イワノヴィチ・ボナフィチンという、1830年に亡くなったロシア海軍中佐であり、それは1820年の露歴8月20日（西暦9月1日）のことだった、ということまでは知っていた。インターネット情報のおかげである。だが、確かな証拠でその裏をとる必要があった。しばらくして北大スラブ研究センター図書室から、ボナフィチンが露米会社の役員たちに提出した報告書の載っている露米会社に関する資料集が所蔵本の中に見つかったとの知らせがあった。これで手がかりが得られたと思った。

報告書の現物はモスクワの帝政ロシア外交文書館に保管されている。ロシア外務省管轄の文書館は極めて閉鎖的で、閲覧サービスが悪いとのうわさだ。第一、申請から3カ月後でなければ許可がおりない。9月のモスクワ行きに間に合うかどうか不安だった。先にモスクワ入りしていた知人から、9月6日から利用が可能との連絡を受けたのは出発直前だった。後で分かったことだが、夏・冬の休暇中、この文書館は完全な音信不通状態になるのである。なるほど、日本大使館に問い合わせてもらってもなしのつぶてだったわけだ。

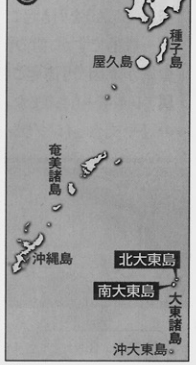
□　□

モスクワのホテルに着いたのは夜の8時だった。電子キーの不具合でフロントと24階の部屋を3度も往復させられた。やっと部屋に入り、トランクを開けようとしたが、開かない。よく似た他人のものだった。渋滞の中で飛行場に戻り、自分のものと交換して宿へ引き返し床に就いた時は、深夜1時を過ぎていた。

9月3日朝8時半、私たちはマイクロバスでボロジノへ向けて一路西へひた走った。しかし、またひどい渋滞に巻き込まれた。今度は自動車事故だ。約束に1時間も遅れてしまったが、あの副村長が笑顔で迎えてくれ、仏の顔見たような気がした。2日後の祭りの準備で、村長をはじめ村役場の全員が出払っていた。そういえば来る途中、村民総出で道路脇のゴミを拾っていたのが見えた。会議室のテーブルにはオープンサンドや菓子がたくさん用意され、副村長さんは手ずから紅茶を入れてもてなしてくれた。南大東村からのメッセージを手渡し、プレゼントの交換をし、今後無理のない付き合いをしていこうと約束した後、彼女は村にある歴史博物館へ招待してくれた。客は私たちだけだったから、心おきなく説明を聞くことができた。

南大東島の全景

南・北大東島　沖縄本島の東方、はるか約360キロの太平洋上に、約10キロを隔てた隣り合わせで南大東島と北大東島がある。両島からさらに南方、約170キロには沖大東島があり、これら3島を合わせて大東諸島と呼ばれている。



ボロジノ村役場の前で。副村長（中央）、南大東村観光大使（左から2人目）ら

きむら・たかし　京大名誉教授、日本ロシア文学会国際交流委員会委員長。1944年（昭和19年）、旧満州（現中国東北地方）生まれ。生まれて間もなく旭川に移り、高校卒業時まで過ごした。モスクワの民族友好大卒、東京外国語大大学院修士課程修了。専門はロシア文学・ロシア文化論。編著書に「カフカース、二つの文明が交差する境界」（彩流社）など。盛岡市在住。

【北海道新聞社許諾　D1010-1104-00006919】
第3種郵便物認可

文化

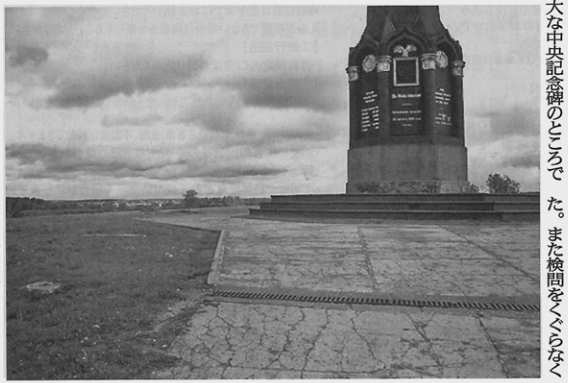
古戦場ボロジノ・南・北大東島・

# 奇縁たどる旅 下

木村　崇

北大総合博物館で11月14日(日)まで（月曜休館）、「海疆（かいきょう）ユーラシア―南西日本の境界」が開催中。その一角に大東諸島のコーナーがあり、木村さんが調査研究速報「もとの名は『ボロジノ』？一境界の島の呼称変遷を検証する」と題してまとめた冊子を閲覧できる。

## 船に込めた魂 島名に


中央記念碑からボロジノ村を望む

祭りの当日は電車で往復した。渋滞に辟易したからである。ボロジノに着き駅舎を出ると、大勢の警官が一人一人の持ち物の検問をしていた。博物館に通ずる一本道を大勢の人の群れが途切れることなく動いてゆく。冬に来たときは犬一匹いなかったのに。ボロジノが原のあちこちにある記念碑の周辺は、どこも人だかりがしていた。セレモニーが博物館前のシェワルジノ多面堡の跡に立っている壮大な中央記念碑のところで行われたらしい。

道路沿いに並んだ無数の売店は、買い物客や食事をする人で埋まっていた。横をロシア軍やナポレオン率いるフランス軍の衣装をまとった色とりどりの部隊が行進してゆく。豪奢ないでたちをした近衛兵の騎馬隊が通り過ぎる。野外劇の舞台はずっと先の緩やかな谷になったところという。再び群衆の移動が始まった。観客席は斜面を三つのブロックに分けて設けられていた。また検問をくぐらなくてはならない。ようやく座れそうな場所を見つけた。

□　□

大音響のアナウンスがあり、両軍が紹介される。1812年に起きたボロジノ戦の各場面を忠実に再現するそうだ。やがて眼下で大砲や銃の轟音が鳴り響き、両軍各部隊の複雑な動きが展開された。大砲のあげる白煙で谷間が覆われる。こんな至近距離で撃ち合っていたのかと、目からうろこが落ちた思いがした。当時の砲弾は榴弾もあったらしいが、炸裂しないタイプが主流である。1日で両軍合わせて7、8万もの犠牲者が出たのは驚異、壮絶な白兵戦が行われたからではないか。砲弾による戦傷者数はずっと少ないはずである。

トルストイが「戦争と平和」の中で、どれほど犠牲を出しても自陣を退こうとしなかったロシア軍将兵の心中を考察しているくだりを、ふと思い出した。「ボロジノ」は、勝敗を超えたロシア民族の魂を奮い立たせる何かを象徴していたのだ（戦傷者数でいうならロシア軍の方が犠牲は多かった）。ボナフィチン海軍中佐が乗ることになる排水量600トンの帆船が建造されたのは、この激戦の直後だろう。「ボロジノ」という船名にはその何かが込められていたのだ。

□　□

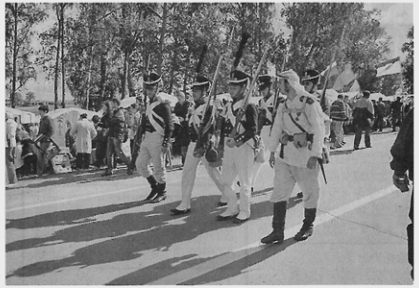
帰国する南大東村の観光大使一行とは別に9月7日朝、私は帝政ロシア外交文書館を訪れた。閲覧室の係が利用方法を説明してくれ、なんと閲覧請求が通るまでには、途中十、日曜が挟まると丸1週間はかかると言われた。だが、担当係員の計らいで特別に閲覧させてもらえることになった。

1818年、露米会社の経営権がロシア海軍に移った。海軍本部のあるペテルブルグから露米会社本部のあるアラスカ南端へと向かった「ボロジノ号」は、まずリオデジャネイロへ渡った。荷下ろして修理した後、喜望峰、インド洋を経て太平洋を横切った。ボナフィチン船長はその前にも「スヴォーロフ号」で世界周航をしているので、2度目の周航だった。彼はマニラから北東に進路をとった。海図にない二つの島を見つけ、それらの緯度・経度を測った。目的地到着後、彼は露米会社の役員たちに詳細な報告をした。その現物が目の前にあるのだ。

しかし、この事実はすぐにそのまま認定されたわけではない。しばらくして海軍本部は太平洋へ向かう船舶に、ロシア艦船によって新発見された一連の島々の確認調査を命ずる。残念ながら、ボナフィチンが亡くなる前に「ボロジノ諸島」の存在は確認されていない。いつ公認がなされたかについては、ペテルブルグにある海軍省の文書館にもぐって徹底的に調べる必要がある。長期戦になるだろう。

今回受け取ったファイルの中には、総員122人の名簿や解読困難な多数の手紙類もあった。これらは次回解読を試みるつもりである。帰路についた「ボロジノ号」のリオデジャネイロ寄港時、露米会社に宛てた船長の手紙には、34人が死亡、40人が回復中と書いてある。それぞれの時代の「境界」を越える人間たちの行為は、こんな犠牲がいつも不可避なのだろうか。

（きむら・たかし＝京大名誉教授）


ボロジノ戦を再現した野外劇。大勢の人たちが見学した。衣装をまとい、野外劇に向かう参加者